

先端研究拠点事業（国際戦略型）の事後評価結果

領域・分野	総合領域・情報学
拠点機関名	京都大学霊長類研究所
研究交流課題名	人間の進化の霊長類的起源
採用期間	平成16年2月1日～平成21年3月31日
日本側コーディネーター（職・氏名）	教授・松沢 哲郎
交流相手国 （国・拠点機関・コーディネーター）	ドイツ・マックスプランク進化人類学研究所 （所長・マイケル トマセロ）
	米国・ハーバード大学 （教授・リチャード ランガム）
	英国・ケンブリッジ大学 （教授・ウィリアム マグルー）
	イタリア・認知科学技術研究所 （主任研究員・エリザベッタ ビザルベルギ）

1. これまでの交流を通じて得られた成果

当該研究交流課題を実施したことによる国際学術交流拠点の形成、成果の学術的価値、若手人材育成への貢献等につき、どの程度成果があったかへの評価。

<p>評 価</p>
<p> <input type="checkbox"/> 十分成果があった。 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね成果があった <input type="checkbox"/> ある程度成果があった。 <input type="checkbox"/> ほとんど成果が見られなかった。 </p>
<p>コメント</p>
<p>当該課題の研究に関して、京都大学霊長類研究所はすでに国際的に高く評価される拠点であったが、ヨーロッパ3国とアメリカそれぞれの研究機関はいずれも世界的にきわめて主導的な存在であり、それらとの連携により学術交流がごくスムーズに実施され、世界的な拠点をつなぐコアとしての働きを担うようになったのはこの事業の大きな成果と言える。</p> <p>成果の学術的価値に関して、当該課題に関係する諸分野はいずれも地道な長期研究が必要なため、早々に著しい成果を求め難いところはあるが、フサオマキザルの道具使用からは霊長類考古学という新分野が発想され、ゲノム解読からは新しい研究アイデアが浮かぶだろう。</p> <p>Natureなどでたびたび特集が組まれるなど高い成果をあげていることは確かと思われるが、オランウータンとボノボに焦点をあてた社会の分野では際立った成果は多くなく、論文数(特に英文)も少ない。</p> <p>国際性に富んだ若手の育成には数多くの大学院生を野外調査地へ送り込むと共に助教／准教授クラスには欧米諸国で研鑽する機会を与えるなど、全国の研究機関に在籍する院生やポスドクにも広くその機会を与え場数を多く踏ませ大いに貢献した。</p>

2. 事業の実施状況

事業の戦略性、拠点形成に向けた実施体制への評価。

評 価
<input checked="" type="checkbox"/> 非常に効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 概ね効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> ある程度効果的に実施された。 <input type="checkbox"/> 効果的に実施されたとは言えない。
コメント
<p>当該課題は、日本における「霊長類」研究の中核的拠点としての京都大学霊長類研究所の役割を一段と発展させる取り組みとして有効に生かされている。拠点機関全体としては十分な取り組みがなされ、戦略的かつ計画的になされたものと評価でき、京大霊長研、ならびに日本の霊長類学の世界的评价を高め、国際的な連携のハブとしての地位を形成する十分な効果をあげている。</p> <p>実施体制に関しては、他の交流相手国拠点機関との連携がどのように具体的に行われていたか見えてこない所があるものの、国内と国外を問わずフィールドでの共同研究、及びシンポジウム、セミナー、講演会等の適宜開催を通して人的交流が頻繁に行われており、運営や連携の体制強化に非常に役立っている。</p>

3. 今後の展望

今後も、複数の学術先進諸国との間で、我が国における先端研究交流拠点として、学術国際交流の発展に継続的な活動が期待できるかどうか、拠点としての代表性への評価。

評 価

- 大いに期待できる。
- 概ね期待できる。
- 一層の努力が必要である。
- 期待できない。

コメント

京都大学霊長類研究所は設立以来、日本における「霊長類」研究の唯一の研究拠点として、霊長類学諸分野の多方面にわたる活動において、国内で常に拠点研究機関としての責務を着実に果たしてきた。その基盤に立った当該課題の実施により、今後も霊長類学、とりわけその発展的展開である「人間学」の分野で、拠点機関としての代表性を維持し続けることは間違いない。

ただ、実験室での研究や施設を利用した研究に関しては申し分ないが、当該課題のテーマ“人間の進化の霊長類的起源”を解明するためには、今回実施の対象とした研究領域だけでは不十分である。特に、野外での研究においてはいかに好適なフィールドを確保し維持し続けるかが最大の問題であり、当該課題の実施に際して利用したフィールドを含め猿害多発の国内や乱開発や政情不安の「南」の国々での良好なフィールド維持に関して、矢継ぎ早やの機構改革の中で真の代表性を発揮できるかが問われることになるだろう。

「霊長類」研究は多様である。近年進展の著しい研究領域を含めた新たな体制を構築するよう努力することが今後も継続的に拠点としての地位（代表性）を国際レベルで保っていくためには不可欠であり、これに関して努力することが期待される。

4. 総合的評価（書面評価）

評 価
<input type="checkbox"/> 当初の目標は想定以上に達成された。 <input checked="" type="checkbox"/> 当初の目標は想定どおり達成された。 <input type="checkbox"/> 当初の目標はある程度達成された。 <input type="checkbox"/> 当初の目標はほとんど達成されなかった。
コメント
<p>世界的にこの分野での研究に主導的なヨーロッパ、北米の研究拠点を引き込んで世界の霊長類学のネットワークを構築し、有機的・継続的な学術交流の拠点を構築しえた。一方で、当該課題のテーマである人間の進化の起源に関して、何がこの5年間で解明されたかは明かではなく、今後は具体的な研究交流目標の設定が必要であろう。</p> <p>国内外での人的交流が頻繁に実施されたことで研究者間の人と人の繋がりをきわめて濃密化させえたり、数多くの大学院生を野外調査地へ送り込むと共に助教／准教授クラスには欧米諸国で研鑽する機会を与えるなど若手研究者の国際舞台での人的交流も積極的に推進した。一方で、国際交流の場が数多く設定されることと、地道な長期継続調査を必要とする本研究分野における若手を将来を担う人材として十分に育成することとの両立をどう図るか、また頻繁な交流を通じた大量の情報が過多になり若手研究者のオリジナルな発想を阻害する恐れへどう対処するか、今後の課題として検討されたい。</p> <p>Nature特集、書籍などでその成果を広く普及した点は高く評価されるべきであり、霊長類研究成果の社会への還元を拠点（京都大学霊長類研究所）全体として取り組むことによって社会的理解や認知の拡大をはかることに、大きな成果をあげている。</p> <p>新たな問題として浮かび上がって来た成果を、専門外の研究者や一般向けにより明快に提示していくことを期待したい。</p>